

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4393000023		
法人名	社会福祉法人 慈友会		
事業所名	グループホーム慈愛		
所在地	熊本県葦北郡芦北町大字天月1345番地		
自己評価作成日	平成30年9月10日	評価結果市町村受理日	平成30年11月28日
※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)			
基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php		

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成30年10月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域とのイベントを計画的に開催又は参加するなど、地域に開かれたホーム作りに取り組んでいます。
密な関わりの中で、地元の方々に温かく見守られていることに感謝しつつ、何が貢献できるのかを考えながら、地域との交流の継続に努めています。
利用者様には、その人らしく過ごしていただけるよう御家族様と連携を図りながら、支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設時から地域の中のホームとしてその役割を認識し、職員は感謝の気持ちを忘れることなく業務にあたっている。この一年も地域との交流や様々な恩恵を受けながら、入居者に安心と笑顔の時間を提供している。地元の特産品(太刀魚や干しエビ)を活かした食事や、入居者が昔取った杵柄を發揮できる場面も数多く設けられており、迎え盆や送り盆で備える饅頭作り、新鮮な旬の食材を求めて早い時間から食材購入に出向くなど、入居者に喜んでもらうための取組が行われている。菜園の草取りや手入れを行うための専用の長靴を購入したり、新たに導入されたリフト車は入居者の外出の幅を広げており、使用前には職員が入居者の立場で乗車し、カーブ時に受ける振動やシートの具合など実際の走行で確認している。ホームは家族同士の関りも密であり、ご高齢になっても外食の為に車で迎えに来る方や、バスを利用し面会に来られる方などを全力で見守り、関係が長く続くような体制を取っている。今後も家族や地域に愛されるホームとして活躍頂きたい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を踏まえた行事計画を立て、地域の中のホームとして、日常生活が活気あるものとなるよう努めている。	法人の地域福祉への思いを継承し、「共生の生活づくり」を基本理念として、毎年年度目標を設定している。年目標は理念をより具体的なものとし、職員が特に力を注ぎたい内容となっている。「入居者への質の高いケア」は、職員の介護の知識や技術向上に直結しており、食事作りや庭先の手入れ、畑作業などホームの生活に共に関り、共に生きていく暮らしづくりが家族や地域からも評価されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域福祉活動やホーム行事を通して、地域との相互交流を深めている。更に、近隣住民からホームの為に交流を行い、地域との関係が構築されている。	開所時より地域の人々を招き、茶話会や敬老会を開き手作り料理を楽しみながら、入居者が人々と交流する機会を作っている。本年度も小・中学生の福祉体験先として、数名の生徒を受け入れているが、入居者が子どもたちとの関りをとても喜ばれ、参加した生徒からも福祉への関心が高まったとの感想が聞かれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年間行事の中で、認知症に関する症状や対応を伝え、理解や支援方法を発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	サービスの提供報告やホームの運営に関する相談等を行い、意見が運営に活かされている。	推進会議には行政や包括の他、地域・家族・入居者の代表、法人団長などホームを支える多様な人々が参加している。両ユニットを交互に会場とすることで、参加者はそれぞれの入居者の様子や、各ユニットの違いなどを確認している。ホーム運営に繋がる意見も多く、リフト車購入の際には、家族から出た意見を受け、車いすのまま職員も実際にリフト車に乗り、身体への負担や乗り心地などを体験している。	小・中学校の福祉体験には、社協も同行し、中心となって実施しており、運営推進会議で目的や体験後の生徒の様子などを、社協から報告してもらったのも良いかと思われる。また、全家族へ引き続き参加の声掛けを継続してもらいたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議や各種イベントに市町村へ参加協力を依頼し、ホームの現況を理解してもらっている。	運営推進会議には行政や包括から毎回参加があり、ホームの現状を発信しながら貴重な意見を得ている。ホーム周辺が防災地区となっていることから、管理者は地域避難所となっている温泉センターまでの避難経路を行政に相談したり、一時避難所として地域の人々の受け入れを行う事などを申し合わせている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	外部研修やホーム内での研修を通し、身体拘束への理解を深めている。拘束をしないケアを徹底している。	職員はホーム内の勉強会や外部研修に参加し、実例をあげて話し合う中で自身に置き換えながら、正しいケアの在り方を学んでいる。慈愛独自の「身体拘束マニュアル」は、自分自身がこの先受けたいと思うケアを目指すことや、ストレス、体調の変化などへの対応策が盛り込まれている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や勉強会を開催し理解を深めている。虐待をしないケアを徹底している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	知識を深めることに努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安や疑問について十分な説明を行い、納得した上で契約を進めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者は、日常のコミュニケーションの中から、家族は、面会時や家族会(年2回)、アンケートを実施するなど、意見や要望を出してもらい、それらを運営に反映させている。	職員は入居者と一緒にゆったりと過ごす時間を設けており、コミュニケーションを図りながら自然な形で聞き取るようにしている。外出への要望や食べたい物などスピーディな、対応で安心に繋げている。家族からの意見や要望については、訪問時に近況を伝えながら確認している。今年度は、忘年会を兼ねた家族会を開催予定であり、リラックスされた中で貴重な意見を求めていきたいとしている。また、公的機関の相談窓口についての説明を行う他、玄関先に意見箱も設置しているが、活用機会は少ないようである。	家族会の中でアンケートを実施するなど、ホーム運営に繋げる努力が窺えた。今後も、家族の意見を把握しやすい内容など、工夫しながらサービスの向上に繋げていかれることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勉強会や日々のコミュニケーションにより随時、職員の意見や要望を聞き、また施設長へ報告を行い、日常業務の流れを見直すなど職員の提案を反映させている	管理者は勉強会や夜勤勤務に自ら入り、コミュニケーションを図りながら一人ひとりの職員の意見などを確認している。出された意見については施設長へ報告を行っており、就業環境の整備や資格取得への配慮など、働きやすい職場環境が整備されている。チームワークの良さはどの職員からも聞かれ、それぞれが得意な事、出来る事で力を発揮し、助け合う中で生き生きと業務にあたる姿は家族の信頼にも繋がっている。	職員家族の応援もホームにとって多い支えになっている。畑の整備やそうめん流し用の竹の準備をはじめ、同業者とのビーチバレー大会には強力な応援団として参加している。今後も職員家族との関りが継続されることを望みたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の意見を聞く機会を設け、向上心を持って働けるような配慮や対応に努めている。また、業務改善委員会を毎月開催し、職場環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修に積極的に参加し、職員が働きながら、技術や知識を身につけていくことが出来るよう支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	町内の同業者とは、研修の中で交流を図り、サービスの質の向上に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期段階は、特に関わりを密に図ることで、本人の気持ちを受け止めたり、声に耳を傾けるなど信頼関係が築けるよう努めている。。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	連絡を密に行うことで、家族の意向や要望、不安などしっかり受け止めながら、関係を築くことに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期段階でカンファレンスを行い家族、本人の希望や要望を伺ってサービスに繋げている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の意思を尊重しやりたい事、出来る事を見極め共に関わり、一緒に過ごす時間を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との連絡を密に取り生活状況、心身の様子等を家族に伝えている。家族の意向を聞きながら、共に本人を支えていく関係づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者にとって大切な家族や親戚、知人との関係が途切れることがないよう、来訪の働きかけ気軽に訪れられる環境に努めている。	家族や親戚、昔からの友人などこれまでの大切な関係が途切れる事のないよう、面会時は次の訪問に繋がるような言葉かけを行っている。地元のお米やエビ飯、太刀魚など芦北ならではの食の提供を継続したり、お盆に備える団子作りや饅頭(ふくれ・とげの葉)など、昔取った杵柄を發揮しながら、古くからの行事を継続できるようにしている。また、近隣の物産館には柏餅の葉や団子をはじめ、その土地ならではの馴染みのものが販売されており、散歩を兼ねて出かけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、職員が仲介役になり、共同生活が楽しくなるように支援している。また、利用者が孤立しないよう、共に暮らしを楽しめるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も状態把握に努め、必要に応じて相談を受ける体制を取っており、これまでの関係性を断ち切らないようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中での会話やコミュニケーションから、本人様の希望や思いを把握し実践へと繋げている。困難な場合は全職員で検討したり、家族へ相談しその都度対応している。	入居者とは一日の中で、ゆっくりと関わる時間を持っており、直接意見や要望を聞きながら暮らしの中に反映している。家族には面会を通じ、入居者への対応やホームへの要望など、日頃の思いを遠慮なく出してもらう様投げかけ、プランに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族、利用者からコミュニケーションの中で、情報を収集し日頃のサービスに活かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝、夕の申し送り時に個々の現状、心身の様子等話し合い、連絡ノートも活用し情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意見や要望、また日頃の職員の気づきなどを取り入れながら、チームで話し合い介護計画書を作成している。	計画作成担当者はプラン作成にあたり、入居者の持てる力を最大限発揮できる環境を整え、立案している。入居者の中にはお元気で、得意な仕事が一段落すると「もうすつとはなかるか?」と、職員に声をかける方もおられ、できることで自信を持ち、ホームの一員として活躍する場をプランに掲げている。また、排泄面でも入居時に紙パンツであっても布にして様子を見たうえでパターンをつかみ、尿取りなどを併用しながら布パンに移行する内容をあげるなど、一人ひとりにきめ細かく対応した内容となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の様子やケアの実践、結果、気づきや工夫を個別記録に記入している。また、日々の状態を申し送ることで情報を共有し、実践や見直しに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々利用者や家族のニーズに応じ、柔軟な対応に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員、地域の消防団、駐在所などの支援体制が構築できている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるよう支援している	月2回の訪問診療と24時間の緊急時対応がなされ、より適切な医療が受けられている。また、専門医へは家族の希望を大切に、医療を受けられるよう支援している。	緊急時対応などの面から家族の了承のもと、協力医による月2回の訪問診療が行われている。24時間緊急時対応は家族や職員にとっても安心して繋がっている。専門医についても家族の希望を大切に、受診は基本的に家族としているが、状況に応じて管理者も同行している。現在、リフト車が購入され入居者や職員にとっても負担軽減となっている。使用開始時は職員も実際入居者の立場で乗車してカーブやシートの具合を体験している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるよう支援している	訪問診療時に看護師へ、状態や気づきなどを伝え相談することで、適切な診療や看護を受けることが出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院に足を運び、病院や家族に、回復状況の確認や情報をいただいている。また、主治医とは週1回の定例会議の中で、情報交換や相談ができている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	医療行為が必要になってくると、ホームでは対応できないことを入居前に説明を行っている。自分達に出来る支援の関わりを尽くし、入院などに至るまでの充実した対応を心がけている。	入居時に医療行為が必要になれば、対応ができない事を説明し、理解を得ている。介護度が3になったら法人の特養を申し込まれる方が殆どであり、職員はホームに出来る支援に精一杯努めることを、開設時から思いを共有している。看取り支援は実施していないが、法人全体の研修に参加し、最終を支える事について学ぶ機会を持っている。	職員は日頃の関わりを大切に日々のケアに取り組んでいる。ホームを退去された後も、その後訃報を知った場合は、通夜や葬儀に参列し、ご冥福を祈っている。今後もホームに出来る最良の支援により、入居者の日々を支えていかれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や応急処置のマニュアルは作成している。重度化に伴い対応が難しくなっており、実践力を身につけるよう努めている。	/	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年3回の災害訓練には、近隣住民も加わり地域全体で災害への危機意識を持ち、協力体制を築いている。	消防署や地域の方々の参加協力を得た訓練を含め、年3回の災害訓練を実施している。有事の際先ずは、Ⅱ号館からⅠ号館へ避難することとしており、職員は常に双方のユニットの状況を把握している。毎月の安全チェックや排水口のチェックをはじめ、冷蔵庫の裏の埃なども細かに確認する事としている。地域の方からは、盛り土が行われており地盤が少し弱い恐れもあることなど、アドバイスを受けており、町の防災担当者とは気になることがあれば相談を行っている。	災害訓練には地域の方が10数名参加されている。今後は、家族にも訓練への参加を呼びかけ実施することで、ホームの取組を知ってもらう機会や家族としての意見や気づきなどを受ける事も出来ると思われる。取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの誇りを尊重することに心掛け、個人情報や守秘義務の取り扱いには、十分注意を払っている。	個々の尊厳やプライバシーに配慮した対応については、会議や研修会などで周知徹底に努めている。訪問当日も入居者の表情を見ながらの言葉かけや、個々のペースでの誘導など日頃の関わりを見る事が出来た。また、管理者は職員の経験や年齢に関係なく、それぞれの入居者への関わり方から学ぶことを心掛けていることも語っている。入居者の好みを把握しながら衣服の選択を行ったり、髪形も馴染みの美容室に伝えながら、本人らしいおしゃれができるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々のコミュニケーションの中で、表情や反応を注意深く観察することに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の利用者の状態や要望に応じて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型や服装などの好みを把握し、個別に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事への感想を検食簿へ記入することで、次の食事支援へと繋げ、楽しみのあるメニューを心掛けている。利用者と一緒に準備、片付けを行っている。	旬や入居者の希望を取り入れた献立をユニットごとに作成している。食材購入も早い時間帯に訪れ、新鮮さを見極めるなど、入居者に美味しい食事を楽しんでもらいたいとする職員の思いが表れている。正月やひな祭りをはじめ、個別の竹の器を使った、夏のソーメンなど、行事食にも工夫が施されている。検食簿には味や量、入居者の満足具合などで次につながるコメントを記入している。入居者も料理に活用する野菜作りや皮むき、食器洗いなど得意分野で食への関わりを持っている。	入居者の席は関係性も考慮して決定しており、職員も一緒にテーブルを囲み食事を摂ることで思いを共有している。今後も入居者の楽しみとなる食事支援を継続いただきたい。また、洗い物の音は入居者に食事を急がせてしまう事もあり、状況を見ながら取り組まれることを望みたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べ物や飲み物の好み、習慣を把握し食事量や水分量を確保している。また、体調や体重の増減、食事のタイミングや食器の工夫など一人ひとりに合わせ支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの能力に応じた口腔ケアを、毎食後行ない、毎日夕食後に義歯の消毒を行っている。必要に応じ、歯科受診を受けられるよう支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、個々の排泄パターンを把握している。紙パンツ使用の利用者へも、表情などから声掛けや誘導を行っている。	基本的に日中は布パンツの使用を支援しており、入居時に紙パンツ使用の方もホームの排泄支援への取組を本人や家族へ伝えていく。夜間は紙パンツの使用など使い分けを行っている。失敗の無い排泄は個々の尊厳や不快なく過ごせることから、把握した排泄パターンを職員間で共有し、声掛けや誘導、自立の継続に努めている。トイレ内は清潔に保たれ、スペアのトイレトペーパーもむき出しにしないなど、環境にも配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表で状況を把握し、飲食物の工夫を行い、個々に応じた対応を行っている。困難な利用者様は、主治医に報告をし服薬の併用を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午前中を中心にして、入浴支援を行っている。季節湯や変わり湯(よもぎや果物)など楽しめる入浴を行っている。近隣にある温泉施設を年に1回利用している。	午前を中心として週3回の入浴支援が行われている。拒否をされる方にも、翌日にずらすなど工夫し週2回入ってもらうよう努めている。浴室内や戸の角、排水溝まで手入れが行き届き、気持ちの良い入浴に繋がっている。地域の温泉センターへも年1~2回利用する他、薬草(ヨモギ)や果物(ミカン・リンゴ)など職員がアイデアを出した変わり湯にも取り組んでいる。	入居者に入浴を楽しんでもらえるよう、職員は様々な工夫やアイデアと浴室の環境整備に取り組んでいる。継続した支援を大いに期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣を把握し、夜間の睡眠状況に応じ日中の午睡を取り入れながら、昼夜逆転に繋がらないように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋に目を通し、内容を確認している。飲み忘れや誤薬を防ぐため、二重確認など徹底した取り組みを行っている。本人の状態の経過や変化等を、定期的に医療機関へ報告することで、治療や服薬調整に活かしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の趣味や特技を活かし、楽しみや役割を持つことで、自分らしく過ごせるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族の協力を得ることで、本人の思いに添った外出支援ができています。	開設当初から地域や家族の協力を得た外出支援は変わることなく、入居者の楽しみや得意の作業を発揮できる機会となっている。野外活動として企画した水俣へのバラ見物では、家族にも参加を呼びかけ実施されている。天候の良い日は努めて近隣の散歩に出かけており、訪問当日も数人の入居者が帽子を被りおしゃべりを楽しみながら出かけられる姿があった。また、草取りや落ち葉掃除など出来る方には一緒に取り組んでもらえるよう、入居者用の長靴が準備されている。	家族の面会後に買い物や食事を楽しまれる方、本人の要望を受け職員が同行した自宅への帰省など個々に応じ外出支援が行われている。今後も入居者が地域や家族の協力により、戸外に出る機会を引き続き支援いたしたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人所持とホーム管理がある。利用者は買い物同行時に、支払いが出来るように支援している。ホーム管理は、収支状況を記録し家族へ定期的に報告している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ホーム側から現状報告を行う時や家族から連絡があった際は、本人と会話ができるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節を感じる花を、各場所に飾ることで落ち着いた空間作りに努めている。また、利用者と手づくりの貼り絵を作成し、ホーム内に掲示することで、季節感を取り入れている。	1年を通してホーム内は散歩中に摘んだ草花や、近隣者からの差し入れ、職員の持ちよった花が飾られ、その時々季節を感じる事が出来る。入居者と一緒に行った壁面や職員の特技を活かした飾り物など、双方のユニットが工夫を凝らした環境が作られている。日中はリビング食堂で過ごされる方が殆どであり、季節や時間帯に応じ空調を管理している。猛暑であったこの夏は、例年よりエアコンを使用する時間も長かったようであるが、苦手な方もおられ、扇風機を併用しながら室温管理が行われている。	ホーム内は臭気もなく、換気や掃除が徹底され居心地の良さに繋がっている。また、職員自身が入居者に安心できる環境を提供している。変わらぬ支援を継続いただきたい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室にソファを置くことで、気の合った利用者同士、またはひとりで思い思いに過ごすことが出来ている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や馴染みのものを活かすことにより、その人らしく暮らせる部屋となっている。	入居後も自宅に居るような雰囲気、安心して過ごせるよう、備品リストをもとに、馴染みの品の持ち込みを依頼している。居室はゆとりの広さと、押入れも備わっていることから、収納・整理がなされ、室内はスッキリとした居室となっている。面会時に昼食をともにされる家族もおられ、居室には一人用のテーブルと椅子が持ち込まれている。晴れた日には努めて寝具を干し、気持ちよい安眠に繋げている。また、衣替えは面会時に確認される家族もあるが、職員も洗濯品を収納する際など、気づいた点は連絡を行っている。	部屋の照明が明るすぎて逆に不安になられる方にはカバーを掛ける等対応している。今後は部屋の雰囲気を壊さないようなカバーについても検討されることで、雰囲氣的にも和らぐものと思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや居室など場所がわかりやすいように、表示することで自立した生活が送れている。		